

今年度は36人が 国際交流研修助成事業を利用して 日本を飛び出しました。

市では、国際交流研修を行う個人や団体に対し、助成を行っています。
平成2年度から始まったこの制度で、
46件のべ351人の市民の皆さんが利用しました。
最近では国外で研修する中学・高校生が増えています。
皆さんの「国境を越えた交流」を応援します。



夏休みにアメリカミネソタ州へ21日間

田村 信太郎さん（大館鳳鳴高校1年）



ホームステイ先の子どもたちと
（左から2番目が田村さん）

もっともっと

いろんなところに行きたくなった。

今回の研修は私に非常に大きな気持ちの変化を与えたと思う。私は今までほとんど秋田から出たことがなかった。また、本当に日本とまったく違うようなところがあるのか信じられないでいた。だから、自分がそんな場所に降り立ったとき、本当に不思議な気持ちになった。少し感動もした。私の知っている世界は、

非常にちっぽけなものだった。ところが今回アメリカへ行き、私の世界はとてつもなく広がった。そしてもっといろいろなところへ行ってみたくなった。きっと世界にはもっともっと、すてきな場所やひとが存在するんだらうと思う。とても気になる。家にいるのが好きな私だけど、外に出て行くのも悪いことじゃないなと思わされた研修だった。

今年度の体験記から
内容の一部省略
しています

9月にオランダ・ドイツ・フランスへ11日間

小林 りつ子さん（小坪川原）

農業の可能性は
無限に広がると
感じました。

国ごとにデザインの違いやユーロ・コイン、花が飾られた家々の窓、食べる肉の多さ、炭酸入りの水など食事や文化の違いに驚きました。地元農家との話し合いで、女性の参画と後継者について質問しました。仕事の上では、女性でも「資格」があれば男性と同じ扱いでした。また、家事と農作業も、夫婦どちらか手の空いたほうが協力する体制で、男女共同参画が進んでいると思いました。後継者は、自分の意思で農業を選

択し、土地などは親から譲られるのではなく、購入する形で、主に職業訓練の学校へ進むそうです。私たちが研修した内容は、それぞれの国のほんの一部ですが、実際に文化交流をして、目で見て、肌で感じて、事前の資料だけでは把握できない面も体験することができました。また私は、母国日本の農業や文化をどれだけ知っていたのかと反省しています。農業に対する意欲も倍増し、今、自分にできることを更に勉強しつづけていきます。



フランスの農家民宿の前で